

ひとひらの雪

(下)

渡辺淳一



渡辺淳一

ひとひらの雪
(下)

ひとひらの雪(下)

著者 渡辺淳一

定価 九八〇円

昭和五十八年二月二十五日 第一刷
昭和五十八年七月十五日 第十二刷

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

102 東京都千代田区紀尾井町三の二三

電話 〇三(265)二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目
次

花 冷	薄 氷	冬 野	寒 露	良 夜	野 分	花 野
261	223	175	134	72	48	5

ひとひらの雪
下

A D・装画・原万千子
坂田政則

花野

秋霖が夜に入って霧に変わった。この数日、雨もよいの日は続くが、霧のなかにある涼しさは、やはり秋のものである。

伊織はその霧に濡れる夜の街をガラスごしに眺めながら、ロビーでコーヒを飲んでいた。銀座に古くからあるホテルだが、まわりのビルにはさまれて、ちょっと見ると小さなレストランかと見間違ふ。だがこのあたりは銀座のバーやクラブの中心街で、銀座でも特に地価の高いところである。

すでに六時に近く、中二階のロビーから見える舗道は車があふれ、そのあいだを店へ向かうホステスらしい女性の姿が見える。まだ雨の名残があるのか、華やかな衣裳を傘でおおっていく人もいるが、なかには水たまりを避けて、和服の裾をからげていく女性もいる。これから飲みに行くのか、四、五人の男連れがそれに見とれ、そのあとを黒い蝶ネクタイをつけたボーイが駆けていく。夜に入りかけた銀座の街は、男女さまざまな人であふれ、見ていて飽きない。

伊織はしばらくその夜の景色を眺めてから、ロビーへ視線を戻した。霞との約束は六時だったが、まだ十分ほど間がある。街と同じように、ここにも華やかな女性が多い。これから客と一緒

に店に入るため待合わせているらしいホステス、スカウトでもしているのか、若い女性と話しているマナージャー風の男、内緒の話でもあるのか、額をつけるように話し合っているママらしい女性、それらにまじって、男達がドアのほうをうかがいながら、思い思いにコーヒーやウイスキーを飲んでいる。男も女も、一人でいるのは、みな待合わせが目的なのであろう。

おそらくこのなかで、人妻を待っているのは伊織だけかもしれない。

あと数分もすれば、この賑わいのなかに霞が現れる。まわりには着物を着ている女性もいるが、霞の和服姿には華やかさのなかに清々^{すがすが}しさがある。とくに今日は、これから踊りを見に行くのだから、きっかりと盛装してくるに違いない。

おそらく霞が入ってきたら、周りの人々はみな振り向くだろう。その女がまもなく自分の前に現れる。その瞬間が確実に近づいていることを知りながら、伊織はいま一つ気持が浮き立たない。その浮かぬ原因が、ここへくる前に会った協和デパートとの打合わせのことであることは、はっきりしている。今日、世田谷につくるはずのコミュニティ・プラザの設計について説明したが、デパート側は最終的な契約を保留した。

今度のコミュニティ・プラザは、住宅地にデパートをつくるというユニークな企画だけに、伊織ものり気であった。いままでのように、盛り場に簞^{たて}え立つ都心型デパートとは違う、田園的で瀟洒なデパートをつくってみたいと思っていた。事実、依頼主のデパートもそれに賛成で、伊織の思うとおり、自由に設計してくれということだった。伊織は早速、スタッフからアイデアを集めて、それをもとに中間に庭園を配した円形のビルをつくることに決した。だが、いざ設計図ができてみると、依頼主からクレームがついた。

担当の須賀部長の話では、この設計図では土地のスペースをとりすぎて、売場面積が圧迫され

るというのである。それにビルのなかに中庭をとったため、正面が狭く外見が貧弱に見えるし、円形の建物は人々に馴染みがなく、空間のロスも大きいという。

この意見に伊織はいささか不満であった。もともとビルはガラス張りの円形にして、あいだに中庭をつくるという案は、初めにデパート側で了承していたはずである。売場面積についても、デパート側が希望したスペースは確保してある。それをいまさら、中庭が余計だとか、売場面積が少ないなどといわれても困る。

今日、部長と会ってわかったのだが、クレイムは、土地の買収が初めての予定どおりすすまなくなったことに原因があるらしい。それに内部に庭園というのは贅沢すぎるとして、社長が反対したのだという。重役のなかには、円形などにせず、いままでどおり箱形の、オーソドックスなビルのほうが風格があると主張した人もいるらしい。

それなら初めからそういつてくれるとよかった。全面的に任せるというから、こちらは考えたのである。

これまで、伊織は一般の建築物はあまり手がけていなかった。美術館や博物館が主であっただけに、発注先はほとんどが公共企業体で、それだけに途中で予算が削られたり、用地が変更になる、などということはなかった。

だが往々にして、民間の発注の場合にはこの種のトラブルが生じやすい。予算はもちろん、建物の趣向も、オーナーの意向で、勝手に変更させられることがある。伊織があまり、民間の仕事に手を出さなかったのは、こういう点がわずらわしかったからでもある。コミュニティ・プラザについては、相手が名のあるデパートだから大丈夫と思っていたが、その見方は甘かったようである。

須賀部長は、こちらに非があったことは認めるから、すぐやり直しをしてくれといったが、伊織はいささかやる気を失っていた。

それにしても、気の滅入ることがあった日が、霞と逢う約束の日であったとは、奇妙なめぐり合わせではある。

伊織はコーヒーを半ばほど飲んだところで、ウイスキーの水割りに替えた。霞と逢う前から飲む気はなかったが、クレイムのつけられた仕事のことを考えているうちに、アルコールが欲しくなってきた。

相変わらず霧が深く、いったんやんだと思った雨が、また降り出してきたのか、ガラス越しに見える夜の街に急に傘が増えてくる。そのままグラスを手に夜の街を見るともなく見ていると、人の近付く気配がし、振り返ると霞が立っていた。思ったとおり和服で、ひき茶色の小紋に金茶の袋帯を締め、右手に萌黄色の蛇の目を持っている。

「ご免なさい、お待たせして」

「いや、僕が勝手に早く来たのです」

まわりの視線が霞に向けられているのを知りながら、伊織は立上った。

「でましようか」

自分と待合わせた女性が、みな注目浴びるのは嬉しいが、反面、照れくさいような気の重いとところもある。いずれにせよ、目立ちすぎるのは考えものである。

ホテルを出ると、伊織はすぐ車を拾った。

今夜はこれから霞と国立劇場に踊りを見に行く約束になっている。年に一度のA流の家元の発表会で、他流の高弟もでる。霞は以前、踊りを習っていたが、今度の家元とは流派が違い、知る

きっかけも別の人を介してらしい。そのあたりについては詳しくいわないが、家元とはもうかなり前から親しい仲らしい。

伊織は踊りに特別関心があるわけではなかったが、その家元の名前はよく知っていたので、誘われたとき即座に承諾した。

「なにか、あったのですか」

車に乗ると、待っていたように霞がきいた。

「別に、どうして」

「考えごとをされてるようでしたから」

たしかに霞が来たとき、伊織はぼんやり窓へ目を向けていた。

「つまらんことです。今日終るはずの仕事に、ちょっと文句がつかましてね」

「あなたの仕事に、文句をいう方がいるのですか」

「もちろんいますよ。僕は雇われて設計しているだけですから」

「なにが、いけないというのですか」

「要するに、全部駄目だということです」

伊織は自虐のない方をしながら、霞に甘えようとしている自分を感じていた。

「いろいろと大変なのですね」

車は銀座を抜け、日比谷から桜田門のほうへ向かっている。雨足はさほど強くなく、霧に煙った外濠の水面に、ビルの灯が揺れている。その明りが消え、右手に暗い皇居の茂みが見えてきたところで、伊織がきいてみる。

「やはり、その踊り、見なければいけませんか」

「ご覧になりたくないのですか」

「もしできたなら、二人だけになりたいと思って」

「そんな……」

霞は呆れたというように溜息をついたが、伊織はかまわず続けた。

「どうしても、見なければいけないわけでもないでしょう」

「そんなこと仰言っても、踊りを見るために来たのですから」

たしかに、今日は初めから、踊りを見るという約束であった。そのことに伊織も納得し、そのつもりで来たはずである。だが霞と逢ったいまは、劇場に行くのが億劫になっていた。これから踊りを見に行けば、終るのは九時を過ぎる。そのあとからでは、軽くお茶を飲むくらいで別れなければならぬ。

「いちおう、見たということにしておけば、いいんじゃないありませんか」

踊りを見ずに、これからマンションかホテルに行けば、二人で三時間は過すことができる。

「だいたい、内容はわかっているでしょう」

「でも、見ると見ないとは違います。それに受付けに切符がありますから」

「それなら、いったん切符を受け取って、なかに入りましょう。ちょっと見てすぐ出たらいい」

「けど、先生の踊りは、あとのほうなのです」

「じゃあ、入ってすぐ楽屋に挨拶に行ったらいい。それなら、きたことがわかるでしょう」

「でも、見ていないのがわかってしまったら……」

「舞台の上からじゃ、わかりやしませんよ。もしきかれたら、うしろから見ていたといえればいい」
車はお濠を右に見ながら、隼町から国立劇場へ近づいている。

「他人が踊るのを見ていても、つまらないでしょう」

「そんなこと、ありません」

口では否定するが、霞も迷っているようである。

「さっき逢ったとき、あんまり綺麗だったので、急に欲しくなったのです」

伊織は前を見ている霞にいったが、それはお世辞でなく、偽らぬいまの本心であった。

劇場に着くと、会はずではじまっていた。受付けにおいてあった切符は、中央のやや前の席らしい。

「やっぱり、坐るのですか」

伊織がきくのには霞は答えず、正面の扉から入っていく。仕方なくあとに従っていくと、客席はほとんど満席で、舞台では一对の男女が踊っている。

伊織は踊りは嫌いではない。歌舞伎はもちろん、花街の踊りの会にも何度か誘われて行ったことがある。だが、とくに自分から好んで行くというほどでもない。

懐中電灯をもった女性に案内されていくと、中央の前から十番目くらいの見やすい席であった。

伊織は霞を奥の席に坐らせてからささやいた。

「これだけ見て、出ましょう」

霞は答えず、前を見ている。舞台では老爺役の男が裾をからげ、老婆役の女が引摺りで踊っている。

踊りを見る度に伊織は日本の踊りほど艶めかしいものはないと思う。もともと踊りは三味線の発達とともに、室町から江戸時代に至って、いまの型に完成されたのであろうが、伊織にはその

所作のすべてが、性の姿態と関連しているように思われる。たとえば中腰から反り身、さらに首の動きから足を割る型まで、さまざまな所作の原型には、男女のいとなみの姿が潜んでいるようである。

もっとも、踊り自体が素朴な庶民のあいだから発生し、花街や歌舞の世界で育まれてきたことを考えると、人間の本然的な性の姿が表現されることは当然かもしれない。だが同じ踊りでも、西欧や東南アジアの踊りは、明るく開放的で、生命の讃歌そのものといった感じが深い。それにくらべると、日本のはいかに華麗でも、奥に一つ控えた部分があり、それが淫靡な連想を呼び起こすのかもしれない。

舞台を見ながら、伊織は、霞が踊った姿を想像した。娘時代に少しやっただけ、いまは怠けているというが、霞の舞台姿なら、華やかさのなかに、ある艶めかしさがあるに違いない。

もっとも、それはいまだからそう思うことで、以前の霞には、そんな雰囲気はなかったかもしれない。しかし、伊織はいまの霞を頭のなかで踊らせて、やはりある淫らかなものを想像する。とんと足を割る。その瞬間、開いた着物のあいだから白い長襦袢がのぞき、霞の足首が垣間見える。初めの「常盤老松」が終って、場内が明るくなった。

「出ましょう」

伊織がささやくが、霞は舞台に目を据えたまま身動き一つしない。どうやらいま立上って、目立つのを恐れているようである。だが、次ののはじまってからでは、かえって出づらい。

「僕が先に出る。君はあとから従ってきてくれ」

「待って下さい、わたしが先に出ます」

慌てて霞が手で制する。

「楽屋には？」

「ちょっと先に行ってきます。出たところのロビーで待っていて下さい」

伊織がうなずくと、霞は呼吸を整えるように少し間をおくと、思いきったように立上った。伊織はなにくわぬ顔でしばらくプログラムに目を向け、それからあとを追った。

扉の外では人々が談笑していたが、じき開演ベルが鳴り、伊織だけがロビーに残った。すでにはじまって三十分以上経っているが、客がときどき現れ、それを待って、受付けに四、五人の女性が生きている。いずれも踊りの関係の人達なのか、若いが和服を着ている。伊織はそちらをぼんやり見ながら考えた。

これからマンションへ行くというのもありきたりだから、たまにホテルにでも行ってみようか。ここからなら千駄ヶ谷か、あるいは代々木あたりが近いかもしれない。そんなことを考えていると、ロビーの右手の奥から霞が戻ってきた。

「会ってきたの？」

「ええ……」

「じゃあ……」

行こうとはいわずに、伊織は先に出口に向かった。はじまって間もないのに出ていく二人を、受付けの女性達は怪訝そうな顔で見送る。かまわず外へ出ると、いま着いて、客をおろしたばかりの車が停っていた。

「代々木……」

運転手にそういつてから、伊織は霞の耳元でささやいた。

「ちょっと、ホテルに行ってみよう」

きこえたのか、霞は相変らず堅い表情のまま前を見ている。

「楽屋で会ってきたから、もう安心でしょう」

「わかりません」

「怒っているの？」

返事をしない霞の横顔を見ながら、その冷たい表情が燃えたつ瞬間を、伊織は期待している。どこのホテルという目途がはっきりあるわけではない。ただ代々木あたりにそれらしいホテルがあることだけは、前を通るたびに知っていた。

もともと、伊織はその種のホテルにはあまり行ったことがない。とくに家を出てマンションで一人で棲むようになってからは、行く必要もないし、たまに行くときでも、きちんとしたホテルのほうが清潔で心地よい。

だがときに、ラブホテルの猥雑さを求めたくなるときもある。今日もその類いだ、伊織がそんな気持ちになったのは、霞のいつになくとりすました表情のせいかもしれない。

「客席はあんなに暗いのだから、いなくても舞台からはわかりませんよ」

相変らず答えない霞の手に、伊織は自分の手を重ねた。

「でも、今日は妙な踊りの会になった」

そういった瞬間、霞が指を抓った。

「いたい……」

伊織は大袈裟にいつて、顔を顰めてみせる。

せつかく踊りを見にきたのに、途中から連れ出されたことに、霞は抵抗を覚えていようである。しかもその行く先が、二人だけの秘密の場所であることに、恥じているらしい。